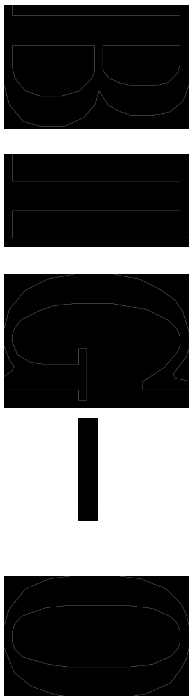


クロムガンナー



ACT:03

エレクトリック・シティ

第三話

脚本ノ小中千昭

Animation Play by Chiak J. Konaka

99ノ02ノ01

登場人物

ロジャー・スミス(25)……………ネゴシエイター

ノーマン・バーグ(54)……………ロジャーの執事

R・ドロシー(18)……………アンドロイド

エンジェル(26)……………謎の美女

ガス・ステーションの男〔ネイティヴ・アメリカン〕

ダーレス〔エレクトリック・シティ・リーダー〕(42)

スヴェン・マウリスキ〔元生物化学者〕(73)

エレクトリック・シティの人々

アウト・オブ・シティノ早朝

どんよりとした雲が覆う街。

そこに、何処より流れるブルーズ・ピアノ。

ロジャーの寝室

ピアノの音に、不機嫌そうに目を覚ますロジャー。

ロジャー「う、ん……？」

客間

入り口で、憤然と立つロジャー。

ロジャー「……おい……」

ピアノをこちらに背を向け弾いている、ドロシー。強い打鍵で、ブルージーなグルーブ感のプレイ。しかし弾いている当のR・ドロシーは、ピンと背筋をたてて無表情。

ロジャー「R・ドロシー・ウェイソライト！」

打鍵を機械的にびたつと止め、くるつと振り向く。

ロジャー「（頭痛を抑え）どういっつもりなんだ一体……」

ドロシー「ノーマンが作ったスクランブルが冷めてしまうわ。い

つもより十五分、起きるのが遅いんだもの」

ロジャー「だからってそういう起こし方があるか」

ドロシー「……」

食堂「金庫室、とか？」

冷めたスクランブルエッグの皿を、あまり食欲なさそうにフォークでつついているロジャー。脇では、ドロシーがティーカップで何かを飲んでい  
る（お茶でない）。

ロジャー「そうか、真似ているだけなんだ。だから不自然なんだ」  
ドロシー「ちゃんと順序だてて言ってくれないかしら」

ロジャー「人間臭いピアノを弾いても、それは真似ているだけ。

だからその音楽は人を心地よくさせる事など出来ない」

ドロシー「(仏頂面)心地よい目覚ましベルなんてないわ」

何かを言いかけるロジャー——、と、突如室内の電気が明滅し、消える。

ノーマン「自家発電に切り換えて参ります。最近多ございますな」

ロジャー「……」

暗い室内にR・ドロシーと二人。

ドロシーのカチューシャがスライドし——、小さい

発光素子群がテーブルを仄かに照らす。

ドロシー「食事を続けたら？」

ロジャー「——やめてくれないか」

ノーマン戻り

ロジャー「ノーマン、電気はどうなってる」

ノーマン「お客様をお通しいたしました」

ロジャー「客を通す？ 私の承諾を得ずに？」

ノーマン「はい」

ロジャー「(ニツ)そうか」

いそいそと立つロジャーを横目で見るドロシー。

ロジャーの部屋(一階)

エレベータを降り、現れるロジャー。

元銀行フロアだった広い空間の中央に立つ、エンジのミニ・スーツ、細い脚を黒いタイツにくるんだ美しい女が振り向く。

ロジャー「(ほう……)お待ちせしました。ロジャー・スミスですが、お役に立てますでしょうか。ミス……」

女「ケイシー。ジェンキンス・パワー・マネージメントの囑託で調査を担当しています」

ロジャー「パラダイム・グループの方ですか……(やや警戒)。

最近また停電が多いですな、ミス・ケイシー」

女「この電気がどこから供給されているかは御存知？ ネゴシエイター？」

ロジャー「！——用件とは……」

アウト・オブ・シティ俯瞰

ビル群から、吊り橋を渡っていくロジャーの車。  
他にそこを走る車など無い。

橋の向こうは——、荒野。

ロジャー車内

ロジャー「（モノ）今回依頼されたのは、これまで使われていなかった水力発電所を再開させるという件だった。何故それをネゴシエーターが？ 当然な疑問だ。その発電所のある朽ち果てた街・エレクトリック・シティの住人達が、再開作業をしようとする電力会社を妨害しているというのだ」

車は荒野の一本道を駆け抜けていく——。

川沿いの道

断崖の下を流れる中流の川。

断崖ルートを走るロジャーの車。

ロジャー車内

ロジャー「（モノ）私は何故この仕事を引き受けたのだろう。街を支配する企業、パラダイムの為の依頼など、普段なら絶対に引き受けないところだ。

電力供給不足？ そんな事はパラダイムが考えればいい。もともとドームの外は安定した電力供給など気にもされていない。では何故——」

フラッシュ／ロジャーの部屋

部屋を出ていく女、振り向き艶やかな笑み。

女 「あなたの評判は聞いてますわ、ロジャー・ザ・ネゴシエーター」

ロジャー車内

思案気にしていたロジャー、ふとパネルの表示を見る。FUELメーターの針が下に向いている。

ガス・ステーション／西日差す午後

山がもうすぐそこに迫る辺りに、ポツンと立つ古びたガス・ステーション。

ロジャーの車が入ってきて止まり、降りるロジャー。

セルフサービスタイプに、燃料タンクに給油ノズルを突っ込み、見回す。

ロジャー「——誰もいないのか……？」

風が、店の軒先に吊るされている奇妙な魔除けのモビールを揺らす。

同ノ建物裏手

バタバタとエンジン音がしているところへ来るロジャー。小さな発電機が駆動していた。

それを見ていたロジャー、ふと見上げる。

電線が頭上に延びており、その先には電柱を伝って山の上へと繋がっている。

ロジャー「……」

ロジャー、電線から延びて建物の壁にある配電盤の前に立ち、そのスイッチを入れる。

バチバチ！ スパークし、ぼうつ、と壁の上にある電灯に明かりが灯る。

ロジャー「電気は来ている……。じゃあ何故……」

電線の向かう先——、山の方を見るロジャー。  
暮れゆく中で、山の上に高層建築群のシルエットが  
浮かんでいる。

そのロジャーの背後——、瞬く電灯が徐々に明るく  
なってきた。

ロジャーは気づかない。

電灯のフィラメントから光の粒子が拡散し——、何  
か光の蛇の様なものが電球の中から伸び出て——

ロジャー、その異様な気配を察知——。バン！

破裂音と共に暗くなり、ロジャー、振り向く。

老いたネイティヴ・アメリカンの男が電球をモップ  
で割り、配電盤のスイッチを切る。

ロジャー「どうしたんです。ここはどうして——」

店主、ギロツとロジャーを睨み——

店主「43ドル75セント。ちゃんと置いていけ」

ロジャー「？」

店主、そのまま建物内へ入ってしまう。

ロジャー、警戒した目で割れた電球を見つめ——

給油スタンドの上に、石で重しされた五枚の紙幣。

ブオオオン！ 野太いエクゾーストを響かせ、ライ  
トを点けて暮れゆく山に向かい車が出ていく。

店内の男、無線電話で何者かと話している——。

## 山岳路／夜

その行き着く先が——、ダム。

さほど大きくは無い。その周縁の山合いに、かつて  
の中国の工業都市の様に、高層ビル群が墓標の様に  
立っている。そう、電気が点いていないのだ。

## ダム湖の岸

車を止め、湖面を見下ろす岸に立つロジャー。

月明かりで照らされる湖。

ロジャー「――発電施設は――」

見回すロジャー、湖へ突堤の様に突き出しがあり、その先に小さな建物が立っている。

発電施設へのゲート前

湖の中に立つ通路は、有刺鉄線で封印されていた。その前に思案気に立つロジャー。

ロジャー「この飾りつけをした人間は――」

ボツ。背後からトーチの明かり。

ジャキツ。銃を突きつけられるロジャー。

ロジャー「よつばど電気が嫌いなんだな？」

手を上げ振り向くロジャー。

トーチを持った数人の男達がいた。

エレクトリック・シティ

遺跡の如き高層ビル群。その下部で、トーチがそこに炊かれている。

そこが集落。

ロジャー「(モノ)エレクトリック・シティというのが、その街のかつての名前だったのかは判らないが、皮肉であるのは間違いない」

同/集落

ロジャーを連れてきたのは、いずれも中年を越した男達。集落に連れて来られてみると、そこに住む人々で若い者はいない事が判る。

ロジャー「どうした。言葉が判る者はいないのか？」

遠巻きに見ていた人々の中から、一番若く元気が良さそうな屈強な男が出てくる。

ロジャー「……」



男 「我々を原始人だというならそれで結構。あんたがパワー・マネージメントの車で来ていたら、今頃はトボトボ歩いて山を下っている頃だろうさ」

ロジャー「——（苦笑）その配慮には感謝しよう。私は交渉人だ。ロジャー・スミス」

男 「エレクトリック・シティへようこそ、ロジャー・スミス。しかしその交渉とやらが発電施設の開放が目的なら、無駄脚だったな」

嘆息するロジャー。

ロジャー「その理由を聞かせてくれないだろうか、ミスター——」  
男 「ダーレス。報告書にはそう書いておきたまえ。理由ならあの電力会社の連中は充分に知ってるさ」

ロジャー「なんだって？」

湖岸

車が止めてあるところへ来るロジャー。

トーチが谷間に仄かに浮かぶ集落に振り向く。

ロジャー「（モノ）神が怒りの雷を落とすだと？ 私は無神論者というつもりも無いが、電気を流して怒る神を信じると言われて、納得する程ナイーヴではない」

発電施設の方を見るロジャー——。

ロジャー「！」

月明かりに照らされた、湖の中の発電施設に人の影が動くのが見えた。

ロジャー「あそこへの通路が破られた形跡は、無い——。地下で繋がっている？」

通路は岸から切り立った崖へ繋がっている。

見上げるロジャー——。

山道

ほぼ漆黒に近い山道を、歩いていくロジャー。

ロジャー「（モノ）——参ったな……。こんな事ならドロシーに

一緒に来て貰うのだった。道を照らすくらいには役にたつただろう……」

木々の向こうに淡い明かりが見えた。

山荘風の建物。そしてその脇に、石づくりの地下へ下る階段口があり、そこに小さなトーチが掛かっていた。

そのロジャーの様子を、遠くから見ている視点。階段口を覗き込むロジャーの後ろから、黒い人影が近づくが——、その視点の主は何もしない。

ロジャー「ここか……」

ミシ。草を踏む音。

ロジャー「（気づき）——私は銃は持たない主義だ。後ろからいきなり殴られるのは好まない」

がん。しかし殴られるロジャー。

暗転。

山間／翌昼

鬱蒼とした木々の隙間から、陽光の筋が差し込む。山荘の煙突から、細い煙が登っている。

山荘内

火が消えた暖炉の脇で、木製の椅子に縛りつけられていたロジャー——、目を覚ます。

ロジャー「——うっむ……」

老人「（オフ）随分朝寝坊だな」

目を向けるロジャー！

偏屈そうな老人が、薪を抱えて入ってきた。

ロジャー「ブルース・ピアノの音でないと目が覚めないんだ」

老人「（睨み）パラダイムがよくそんなぐうたらを雇ったな」

老人、重そうに薪を降ろしていく。  
腰にくるらしく、辛そう。  
と、いつの間にか脇に来ていたロジャー、老人から  
薪を降ろしてやる。

老人「！」

ロジャー「ぐうたらではあっても、お年寄りの手伝いをしない程  
礼儀知らずではありません（笑み）。それに、私はパラ  
ダイムの人間でもない」

老人「——」

薪の火で、フライパンを振るロジャー。手早く卵を  
かき混ぜる。

ロジャー「私のスクランブル・エッグもそう捨てたものじゃない  
んですよ」

テーブル前に座りマグを両掌で包んでいる老人。

ロジャー、卵を皿に盛る。

ロジャー「どうして下の街でみんなと一緒に暮らさないんです？」

老人「——あんたの知った事じゃない」

ロジャー「（苦笑）私は交渉役としての仕事に失敗したんです。

これは純粋な好奇心による疑問です。さあ、どうぞ」

老人、仏頂面で、フォークを手に取り、卵を食べる。

ややして、おもむろに塩をかけ始める老人。

やや気を悪くするロジャー。

空になった皿を前にコーヒーを飲んでいるロジャー。  
老人はまた外で薪を割り始めている。

ロジャー「——」

視線を背後に向けるロジャー。奥の部屋——

## 奥の部屋

ギツ。ドアを開け、入って来るロジャー。

ロジャー「——ここは……」

実験室、だったらしい。

空の大きな水槽が中央にあり、その周囲には数々の機器が朽ちている。

見回しながら進むロジャー。

机に目をやると、書類が散乱している。化学式が書かれている。

ロジャー「ここはただの発電施設じゃなかったのか……？」

死んでいる機器を見るロジャー――

と！ 突如機器の灯が次々と入っていく。

ブーン。室内がハム音に包まれ――

ロジャー「わ、私は何も触ってないぞ」

機器類のパネルが狂った様に明滅し――

ロジャー「！」

機器間を走るパルスが、まるで生き物の様に――

ロジャー「これは……」（ハッ）電気を通じさせたのか」

ロジャー、室外へ駆け出す。

## 山荘の外

駆け出てきたロジャー。

老人が、湖を見下ろす崖上で立ち尽くしていた。

ロジャー「電気が――」

愕然としている老人。

老人「タービンを誰かが回した……。 （ハッ）あなたの仲間が

いたのか」

弱々しくロジャーの胸を掴む老人。

ロジャー「私は独りで来たのだ。仲間などいない――（思案）」

## 地下通路入り口

木製のドアには錠が掛けられていた筈だが、それが壊されている。

ロジャー「慣れた奴だな」

降りようとする老人を止めるロジャー。

老人「タービンを止めねばならんだ！ 早くしないと大変な事

が——（ブルブル震えながら）

ロジャー「（微笑）私に任せて下さい。この手口はプロの仕業です。あなたも、プロの研究者だったのなら判るでしょう。仕事というものは、プロがするべきものだ」と

老人「……」

地下階段

ジメジメとした石造りの階段を、トーチを掲げ、ロジャーが単身降りていく。

地下通路

階段を降りると、狭い通路が伸びている。巨大なタールビンの音がここにまで振動として響く。

進もうとしてロジャー、ハツとなりトーチを消す。壁に身を寄せ、じつと奥を見つめる。

やがて、マグライトの明かりが近づいて来る。

ロジャー「……」

人影が見えた。それは——

ロジャー「人を利用しただけなんだな？ ミス・ケイシー」

体にフィットしたボディ・スーツを着ているのは、依頼人の女。やや驚いた顔をしていたが——、すぐに不敵な笑みを浮かべ

女「こんなルートを見つけてくれたんだもの、あなたは大人なゴシエーターだわ」

ロジャー「（怒りを抑え）フェアではない依頼人の仕事は断る」

女「（艶やかに笑み）もう目的は果たしてくれたわ、充分ね」

ロジャー「——君はパワー・マネージメント社の人間ではないのか、ミス——」

女「エンジェル、って呼んで（クスクス）」

ロジャー「（眉を顰め）とんだ墮天使だ——」

と！ 突如激しい振動。

エンジェル「なっ、何ッ？」

バチバチバチ！ 通路内をパルスが駆け抜けていく。  
ロジャー「——神の、怒り……？」  
ビシ！ ビシ！ 石の隙間から水が吹き出し始める。  
ロジャー「ここは危ないぞ！」  
エンジェル「なんでよ！ あたしはただタービンを再起動させた  
だけなのに！」  
二人、階段の方へ駆けだす。

#### 階段

地上へ向かって階段を駆け登っていく二人。

#### 地上／山荘前

飛び出す二人。ロジャー、崖の方へ。  
ロジャー「老人はどこへ行った……？」  
エンジェル「見て！ 何よあれは！」  
ロジャー「！」

崖から望む湖面に、何か巨大な影が蠢いている。  
湖面からは時折、激しいパルスの明滅。

#### エレクトリック・シティ

騒然となる集落の人々。  
ダーレス「——あいつがタービンを回したのか。くそう！」  
湖が凄まじいパルスで明滅。ゴロゴロゴロ……。  
それまで晴れていた空に、雷雲が覆い始め、辺りは  
暗くなっていく。  
ダーレス「（見上げ）神が——」

#### 湖岸

山道を駆け降りてきたロジャーとエンジェル。  
湖面が盛り上がり、何か巨大なものが蠢いている。

エンジェル「何んなのよあれは！　あたし聞いてないわ！　あんな――、あんな――」

ロジャー「――（呟く）さっきの実験室……、水槽……」

ザバ！　ついにその姿を現す湖に眠れる神。

甲高い声を発し、その長い軀を水上に出す。

エンジェル「――あれは、何……？」

ウナギというものを、彼らは見た事が無いのだ。

巨大電気鰻、全身からパルスを放っているが、咆哮する度に、それは凄まじいものとなって辺りを駆けめぐる。

ロジャーを置いて駆けだすエンジェル。

ロジャー「おい！」

エンジェル「あたしはもう関係無いわ！　あたしの仕事は終わっただから！」

ロジャー「そっちは危ないぞ！」

エンジェル「（オフ）車があるの！」

ロジャー「（嘆息）――とんだ墮天使だ……」

ロジャー、顔を引き締め、腕時計を開く。

ロジャー「ビッグオー！」

地下トンネル（旧大陸間弾道弾輸送線路）

ゴオオオオオオオ！　やや新しい近代的なトンネルの内部を、凄まじい速度で疾走する鹵型列車。

## 湖岸の道

走るロジャー、腕時計のノーマンと会話しつつ

画面内ノーマン「昨晚、御指示の通り近くのルートまで輸送しておきました。あと十五秒で到着するでしょう」

ロジャー「ありがとう、ノーマン」

ザバツ！　それまで湖面に姿を消していた巨大鰻、突然ロジャーのすぐ眼前に顔を突き出す。

ロジャー「うわっ！」

キイイイイ！ 鰻が啼いた！  
覚悟するノーマン！

と！ その眼前をヘッドライトを点けた赤い車が疾走していく。

ロジャー「！」

エンジェル「（車内より）生きてたらまた会いましょ！」

ロジャー「なんて——（ハッ）」

巨大鰻、赤い車に関心を移した。

ロジャー「まずい！」

キイイイイイ！

鰻の咆哮で凄まじいパルスが湖岸へ！

エンジェル車内

ステアリングを握っていたエンジェル——

エンジェル「きゃあああ！」

パルスが引くと——、プスンプスン……。

全てのメーターがダウン、速度も落ちて——

エンジェル「ちよっ、何よ、何で急に動かなくなるのよ？」

振り向くエンジェル——

エンジェル「いや、いやあああ！」

巨大鰻が迫って来る！

もどかしげにドアを開けようとするエンジェル。

エンジェル「あう、うつつうっ！」

開かない。ガクンガクンとドアを揺すり——、

開いた！ 無様に転がり落ちるエンジェル——

エンジェル「！」

鰻、咆哮せんと巨大な口蓋を開き——

エンジェル「——うそ……」

ビッグオーノコクピット

暗い室内。球面ブラウン管に灯が入り——、細い線が画面いっぱいになって——



『神の名においてこれを鑄造する。  
汝ら罪なし』

湖岸

ゴゴゴゴゴゴ……。

地割れが始まり、道路に亀裂。

エンジェル「へ……？」

ドオオオオオン！ エンジエルの車が突如虚空に浮いて——、湖に落ちる。

エンジェル「——あたしの、車あ……、きゃっ」

ズゴゴゴゴゴゴ

地下より現れ出る——

エンジェル「——メガデウス……」

ビッグオー、登場！

鰻、突如現れた存在に警戒態勢。

エレクトリック・シテイ

集落の人々が集まり、湖を固唾を呑み見つめる。

ダーレス「——あれは何だ……？ あの黒い巨人は……」

湖岸

キイイイイイイ！ 全身にパルスを漲らせ、ピッ

グオーの肩に食いつく巨大鰻。

ビッグオーノコクピット

室内に電流が走る！

ロジャー「くううう！」

総毛立つロジャー、必死に堪え、レバーを——

湖岸

ゲシ！ ビッグオーの拳が鰻の顎をヒット！  
キイイイイイ！ 鰻、離れる。

ビッグオー／コクピット

ロジャー「（ふうう）……、こんな小さなダムが、どうして電力供給に大事なのかよく判ったよ。人に作られた神なんだ  
なお前は——」

スリット越しに見える鰻。憎悪を表情に浮かべ、再びビッグオーに向かって来る。

ロジャー「永遠に眠っていたまえ！」  
素早くレバー操作。

湖岸

ビッグオーのアーム、ガキンと縮んでセットアップ。  
迫る巨大鰻！

ビッグオー、拳を振りかざし——

バシユ！ パイル・アームが鰻に炸裂！

キイイイイイ！

鰻、咆哮！ その叫びは凄まじいパルスとなって、  
パイル・アームの衝撃を拡散！

ビッグオー自身にまでその衝撃波が！

ビッグオー／コクピット

ロジャー「ぐううっ！」

湖岸

キイイイイイ！ 鰻、ビッグオーの頭部を噛む！

ギリ、ギリギリギリ……。

ザッバアアアン！ ビッグオー、水の中に引きず

り込まれた！  
バチバチバチ！ 全身ショートするビッグオー、鰻に巻きつかれていく。

ビッグオー／コクピット

ロジャー「こうなったら——」

ロジャー、赤いガードのついたボタンを開き、スイッチを押そうとした時——

ロジャー「！」

ロジャーの視界に湖面が映る。

小さな手漕ぎボートが、湖内に建つ発電施設に向かっていく。

湖面

全身を黒ゴムの防御服に包んだ老人がボートを漕いでいる。その背後にそそり立つ、鰻に巻きつかれたビッグオー。

ビッグオー／コクピット

ロジャー「——今、クロムバスターを撃つたら——。くそつ、何

であの爺さんは今ごろ——（ハッ）」

発電施設

ボートを縁に留め、施設に入っていく老人。

ビッグオー／コクピット

ロジャー「——そうか……、止めてくれるんだな……」

湖面

コクピット前に顔を向ける鰻——、口蓋を開く！

#### 発電施設内

操作盤に向かっていている老人、並んだスイッチを切つていく！

タービンの音、静まっていく。

#### 湖面

湖中を覆っていた淡い光が消えていく。  
鰻の動き、停まった。

#### ビッグオーノコクピット

赤い蓋内のボタンを押すロジャー！

#### 湖面

ビッグオーの頭部のクリスタルが眩く輝き——  
強烈なるビームが炸裂！！ 巨大鰻の軀を千々に裂く！  
キイイイイイイイイイ！  
頭部だけとなり、最後の咆哮をする鰻——  
その叫びのパルスが天に登り——

#### エレクトリック・シティ

墓標の様に建っている高層ビル群。その頭上より雷が落ちて——  
全てのビルの内側より眩い光が。  
まるでシャンデリアの如き——  
陶然と見つめる集落の人々。

ダーレス——これが、言い伝えられたこの街の本当の姿……。

やはりあれは神だった……」

それは、美しい光景。しかしやがて、再び消えていく運命にあった……。

### ロジャーの部屋 / 翌日夜

テラスから、照明で輝くドーム群を見つめているロジャー。背後からブルーズ・ピアノの音。

ロジャー「（モノ）私はその後、発電施設を再起動出来ない様に破壊して、その土地を去った。それが、あの怪物を作りあげてしまったあの老人との、私なりのネゴシエーションの決着だった。人が作り上げた電気をもたらす神——、あの人工生物を生み出すメモリーをあの老科学者、スヴェン・マウリスキが持っていたのが不幸だった。パラダイム社はあの怪物の死骸の一部を回収したらしいが、あんなものをまた作るうなどとは思わないだろう……」

ロジャー、ふと不機嫌そうな顔になり、振り向く。

R・ドロシー、大げさな、いかにもブルーズ・ピアノストが一心不乱に弾いてる様な動き。

ロジャー「——（嘆息）だから格好だけ真似したって意味がないんだって何度言えば判る」

ピタッと動きを止め、淡々とピアノを引くドロシー。  
ロジャー「大体なんでブルーズなんだ」

ドロシー「あたしだって、そういうの弾いてみたい気分の時があるのよ」

ロジャー「気分？——まあいいか……」

つづく